

地位が低い攻撃対象者に対する TDA に及ぼす 関係性の調整効果

淡野 将太

(2009年10月6日受理)

The Moderating Effect of Relationships on Triggered Displaced Aggression
Towards Low-Status Targets

Syota Tanno

Abstract: Triggered displaced aggression (TDA) toward low-status people is more excessive than high-status people (Tanno, 2008). Present study examined buffering effect of TDA toward low-status targets via manipulating relationships between participants and targets. As predicted, good relationship (i.e., participants liked the targets) reduced aggression relative to bad relationship (i.e., participants disliked the targets) or no-information control condition. Correlation indicated that the liking induced by good relationship reduced aggression, and anger which induced aggression reduced by good relationship. Additionally, result indicated that TDA toward bad relationship was more likely than no-information control condition ($p = .074$). This suggests that combination of negative attributes of targets facilitate TDA.

Key words: displaced aggression, triggered displaced aggression, buffering effect

キーワード：置き換えられた攻撃, TDA, 緩衝効果

置き換えられた攻撃 (displaced aggression) とは、個人が挑発事象を経験した時に、挑発の源泉ではない他の対象に表出する攻撃のことである (Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939; Hovland & Sears, 1940)。例えば、教師から怒られた高校生がクラブの後輩にやつ当たりする、といった攻撃行動が置き換えられた攻撃である。また、誘発されて表出する置き換えられた攻撃のことを TDA (triggered displaced aggression) という (Dollard, 1938)。上記の例において、後輩のちょっとした失敗をきっかけにやつ当たりした場合、これを TDA と呼ぶ。

置き換えられた攻撃は、TDA の形態で表出されやすいことが置き換えられた攻撃に関する理論的考察 (Miller & Marcus-Newhall, 1997) およびメタ分析 (Marcus-Newhall, Pedersen, Carlson, & Miller, 2000) において指摘された。これを受けて Pedersen,

Gonzales, & Miller (2000) は、攻撃の置き換えパラダイムを発展させて、実験室において置き換えられた攻撃を誘発する TDA パラダイムを構築した。そして、置き換えられた攻撃の誘発メカニズムに関する理論モデルである TDA 理論 (theoretical model of triggered displaced aggression: Miller, Pedersen, Earleywine, & Pollock, 2003) が提唱されるに至った。TDA 研究は現在、TDA 理論を軸に、TDA パラダイムを用いて置き換えられた攻撃の誘発メカニズムについて精緻化を行いながら、置き換えられた攻撃に従事しやすい個人差を測定する尺度の開発や、置き換えられた攻撃を誘発しない緩衝効果 (buffering effect) の検討を行うなど、研究を発展させている (レビューとして、淡野, 印刷中)。

緩衝効果の視座から3つの実験を行った Pedersen, Bushman, Vasquez, & Miller (2008) は、攻撃対象者

の特性と誘発事象の交互作用を検討し、攻撃対象者の特性の如何によってTDAの強度に差異が見られるか否か、また、誘発事象の有無によってTDAが表出されるか否かを検討している。研究1では、TDAに及ぼす態度の類似性および誘発事象の影響を検討した。その結果、類似群 (i.e., 攻撃対象者と実験参加者の意見が同じ) においては誘発事象の単純主効果が有意ではなく、攻撃対象者は誘発事象を行ってもTDAを表出されないのに対し、非類似群 (i.e., 意見が異なる) においては誘発事象の単純主効果が有意であり、攻撃対象者はTDAを表出されること、また、類似・誘発事象あり群の攻撃対象者に対する攻撃評定は、非類似・誘発事象あり群の攻撃対象者に対するTDAより有意に低いことが示された。研究2では、TDAに及ぼす所属集団および誘発事象の有無の影響を検討した。その結果、内集団群 (i.e., 実験グループが同じ) においては誘発事象の単純主効果が有意ではなく、攻撃対象者は誘発事象を行ってもTDAを表出されないのに対し、外集団群 (i.e., 実験グループが異なる) においては誘発事象の単純主効果が有意であり、攻撃対象者はTDAを表出されること、また、内集団・誘発事象あり群の攻撃対象者に対する攻撃評定は、外集団・誘発事象あり群の攻撃対象者に対するTDAより有意に低いことが示された。研究3では、TDAに及ぼす誘発性 (valence) および誘発事象の有無の影響を検討した。その結果、ポジティブ群 (e.g., 誠実な) においては誘発事象の単純主効果が有意ではなく、攻撃対象者は誘発事象を行ってもTDAを表出されないのに対し、統制群としてのニュートラル群 (e.g., 道徳的な) およびネガティブ群 (e.g., つまらない) においては誘発事象の単純主効果が有意であり、攻撃対象者はTDAを表出されること、また、ポジティブ・誘発事象あり群の攻撃対象者に対する攻撃評定は、ニュートラル・誘発事象あり群およびネガティブ・誘発事象あり群の攻撃対象者に対するTDAより有意に低いこと、さらに、媒介分析から、ポジティブな誘発性が攻撃対象者に対する好意的印象を増加させ、増加した好意的印象が攻撃評定の低減に影響を及ぼすことが示された。すなわち、攻撃対象者の特性が緩衝効果として作用し、誘発事象を行っても置き換えられた攻撃を誘発しないことを示している。

Pedersen et al. (2008) の研究2では、外集団の攻撃対象者は、緩衝効果が作用する内集団の攻撃対象者と比較して、TDAを表出されやすいことが示された。Vasquez, Ensari, Pedersen, Tan, & Miller (2007) は、集団バイアスを低減する脱カテゴリー化 (Ensari & Miller, 2002) として個人化 (personalization: i.e., 自

他比較、自己開示) および区別 (differentiation: i.e., 集団からの区別) を用いることで、外集団の攻撃対象者に対するTDAの低減を試みた。2つの研究から、外集団の攻撃対象者に対するTDAに及ぼす脱カテゴリーおよび誘発事象の有無の影響を検討した。研究1では、自他比較群 (i.e., 実験参加者のパーソナリティ特性と攻撃対象者のパーソナリティ特性の比較) および外集団からの区別群 (i.e., 攻撃対象者のパーソナリティ特性と攻撃対象者が所属する集団の一般的なパーソナリティ特性の比較) においては誘発事象の単純主効果は有意ではなく、攻撃対象者は誘発事象を行ってもTDAを表出されないのに対し、統制群としての情報なし群においては誘発事象の単純主効果が有意であり、攻撃対象者はTDAを表出されること、また、自他比較・誘発事象あり群および外集団からの区別・誘発事象あり群の攻撃対象者に対する攻撃評定は、情報なし・誘発事象あり群の攻撃対象者に対するTDAと比較して有意に低いことが示された。研究2では、自己開示群 (i.e., 攻撃対象者によるパーソナリティ特性の自己開示) においては誘発事象の単純主効果が有意ではなく、攻撃対象者は誘発事象を行ってもTDAを表出されないのに対し、統制群としての情報なし群においては誘発事象の単純主効果が有意であり、攻撃対象者はTDAを表出されること、また、自己開示・誘発事象あり群の攻撃対象者に対する攻撃評定は、情報なし・誘発事象あり群の攻撃対象者に対するTDAと比較して有意に低いこと、さらに、パス解析から、自己開示は攻撃対象者に対する好意を増加させ、攻撃評定に負の影響を及ぼすと同時に、攻撃評定に正の影響を及ぼす誘発事象に対するネガティブな反応は、自己開示によって減少することが示された。すなわち、TDAを表出されやすい攻撃対象者であっても、脱カテゴリー化を行うことが緩衝効果として作用し、誘発事象を行っても置き換えられた攻撃を誘発しないことを示している。

対人関係における地位関係に着目した淡野 (2008) は、挑発者および攻撃対象者の地位として所属するコース (学科・専攻) の先輩 (i.e., 先輩群)、同輩 (i.e., 同輩群) および後輩 (i.e., 後輩群) を設定し、TDAに及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響を検討している。その結果、攻撃対象者の地位の主効果から、後輩群の攻撃対象者のTDAが先輩群の攻撃対象者より有意に強く、攻撃対象者の地位が低い場合にTDAが表出されやすいことが確認された。本研究では、攻撃対象者をTDAが表出されやすい地位が低い攻撃対象者に限定し、地位が低い攻撃対象者に対するTDAに及ぼす特性の緩衝効果の検討を試みる。

TDA 理論 (Miller et al., 2003) は、攻撃対象者の特性が、挑発事象と些細な誘発事象の交互作用に影響を及ぼすと仮定する。攻撃対象者のネガティブな特性は、些細な誘発事象をより敵意的に解釈する方向に影響し、これらの特性を備えた攻撃対象者は置き換えられた攻撃を誘発しやすい。一方、攻撃対象者のポジティブな特性は、誘発事象を敵意的ではないものとしてもしくは状況要因による不可避なものとして解釈する方向に影響し、これらの特性を備えた攻撃対象者は置き換えられた攻撃を誘発しにくい。この仮定を実証した研究が先述の Pedersen et al. (2008) であり、攻撃対象者の特性としての攻撃者と攻撃対象者の態度の類似性の高さ (研究 1)、攻撃者と攻撃対象者の所属集団が同じであること (研究 2) および攻撃対象者の誘発性のポジティブさ (研究 3) はそれぞれ、TDA の緩衝効果として作用し、攻撃対象者が誘発事象を行っても置き換えられた攻撃を誘発しないことを示した。本研究は、攻撃対象者の特性として攻撃者と攻撃対象者の関係性の良好性 (i.e., 良好, 不良および統制群としての情報なし) および誘発事象の有無を操作し、地位が低い攻撃対象者に対する TDA に及ぼす関係性の調整効果を検討する。TDA が表出されやすい地位が低い攻撃対象者であっても、攻撃者との関係性が良好である場合は、関係性の良好さが緩衝効果として作用し、誘発事象を行っても置き換えられた攻撃を誘発しないと予想される。

方 法

研究参加者

研究参加者は、大学生 48 名 (女性 39 名, 男性 9 名)、平均年齢 19.15 歳 ($SD=0.54$) であった。

要因計画

要因計画は、3 (関係性: 良好, 不良, 情報なし) × 2 (誘発事象: あり, なし) の 2 要因研究参加者間計画であった。各群に 8 名を割り当てた。

手続き

質問紙を用いて研究を行った。各研究参加者は、ランダムに配布される 6 種類の質問紙の中から 1 つを受け取り、回答を行った。

質問紙の構成

TDA パラダイムの仮想場面法 (淡野, 2008) を用いて、攻撃者と攻撃対象者の関係性として良好, 不良および統制群としての情報なし, 誘発事象のありおよびなしを操作した 6 種類の質問紙を作成した。全ての群が挑発事象あり群であった。

(a) 挑発者および攻撃対象者の地位 TDA パラダ

イムを用いた研究では、Bushman, Bonacci, Pedersen, Vasquez, & Miller (2005) の研究 3 および Pedersen et al. (2008) の研究 1 において他の実験参加者を装ったさくらが挑発者となっている場合を除き、挑発者が実験者として設定されている (Aviles, Earleywine, Pollock, Stratton, & Miller, 2005; Denson, Aviles, Pollock, Earleywine, Vasquez, & Miller, 2008; Denson, Pedersen, & Miller, 2006; Pedersen, 2006; Pedersen et al., 2000; Vasquez, Denson, Pedersen, Stenstrom, & Miller, 2005; Vasquez et al., 2007)。また、TDA に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位を検討した淡野 (2008) では、挑発者の地位の主効果は得られず、挑発者の地位の如何によって攻撃評定に差が生じていない。そのため、挑発者に先輩を設定した。攻撃対象者は、地位が低い攻撃対象者として後輩を設定した。

(b) 攻撃者と攻撃対象者の関係性 攻撃者と攻撃対象者の関係性の操作は、関係性良好群では好きな後輩 (i.e., あなたと後輩は仲が良く, あなたはこの後輩のことが好きでした), 関係性不良群では嫌いな後輩 (i.e., あなたと後輩は仲が悪く, あなたはこの後輩のことが嫌いでした) および統制群では関係性に関する情報の記述のない後輩をそれぞれ設定することで行った。555 語の個人特性に関する好感評定 (likableness rating) をリスト化した Anderson (1968) では、好きな (likable) という個人特性は 6 を最良とする 0 から 6 の 7 段階評定における平均評定値が 5.0, 嫌いな (dislikable) という個人特性は平均評定値が 0.9 となっており、差異性が示されている。

(c) 物語文 研究参加者が所属するコース (学科・専攻) の教授から仕事の手伝いを依頼され、先輩および後輩と 2 人 1 組のペアで行う仕事をする物語文であった。挑発事象は、研究参加者が先輩から作業が遅いと指摘され、作業能力に関して非難される場面を設定した。次に、後輩との作業に移る前に、好き、嫌いおよび情報なしの関係性に関する記述を行った。ここで、関係性操作の有効性を確認するため、Pedersen et al. (2008) および Vasquez et al. (2007) を参考に、作業前の後輩に対する印象評定 3 項目 (好感が持てる, 良い仕事をすると思う, 良い特性を持っていると思う) について 7 段階評定法 (全くあてはまらない: 1 - とてもよくあてはまる: 7) で評定させた。誘発事象は、研究参加者が後輩から作業のペースを上げることを提案されるもしくはそのまま良いと言われる場面を設定した。誘発事象後の怒り感情を測定するため、誘発事象の後に怒り感情 2 項目 (怒った, イライラした) について 7 段階評定法 (全くあてはまらない: 1 - とてもよくあてはまる: 7) で評定させた。攻撃場面は、

教授から後輩の仕事量を定めるよう指示される場面（仕事量1項目：仕事量をどのくらいにするか）と、教授から後輩のアルバイト代の参考として後輩についての印象を尋ねられる場面（印象評定3項目：次に仕事をするときも一緒にしたいか、人物的に好ましいか、友好的か）で構成し、それぞれ11段階評定法で評定させた（e.g., 仕事量：非常に少なくする：1－少なくする：4－多くする：8－非常に多くする：11）。

結 果

操作チェック

関係性操作による攻撃対象者の印象評定3項目（ $\alpha = .91$ ）について、 t 検定を用いて関係性良好群と関係性不良群の差の検定を行った。その結果、関係性良好群（ $n = 16, M = 15.25, SD = 2.89$ ）が関係性不良群（ $n = 16, M = 8.38, SD = 2.83$ ）より有意に高かった（ $t(30) = 6.81, p < .001$ ）。統制群としての情報なし群においては攻撃対象者の印象評定を設定しなかったため、分析に含めなかった。

攻撃評定

攻撃評定4項目（ $\alpha = .77$ ）について3（関係性：良好、不良、情報なし） \times 2（誘発事象：あり、なし）の2要因分散分析を行った。その結果、関係性の主効果（ $F(2, 42) = 19.11, p < .001$ ）、誘発事象の主効果（ $F(1, 42) = 51.79, p < .001$ ）および交互作用（ $F(2, 42) = 6.69, p < .01$ ）が有意であった（Figure 1）。交互作用について単純主効果検定を行った結果、関係性良好群においては誘発事象の単純主効果は有意ではなく（ $F(1, 42) = 1.48, ns$ ）、関係性良好・誘発事象あり： $M = 19.00, SD = 2.12$ 、関係性良好・誘発事象なし： $M = 17.50, SD = 1.00$ ）、関係性不良群（ $F(1, 42) = 36.97, p < .001$ ）、関係性不良・誘発事象あり： $M = 27.38, SD = 1.73$ 、関係性不良・誘発事象なし： $M = 19.88, SD = 3.33$ ）および情報なし群（ $F(1, 42) = 26.71, p < .001$ ）、情報なし・誘発事象あり： $M = 24.50, SD = 2.60$ 、情報なし・誘発事象なし： $M = 18.13, SD = 2.37$ ）においては有意であった。また、誘発事象あり群における関係性の単純主効果が有意であり（ $F(2, 42) = 23.80, p < .001$ ）、関係性良好群の攻撃評定は関係性不良群および統制群のTDAより有意に低かった。誘発事象なし群における関係性の単純主効果は有意ではなかった（ $F(2, 42) = 1.99, ns$ ）。

相関分析

関係性良好・誘発事象あり群および関係性不良・誘発事象あり群のサンプル（ $n = 16$ ）を用いて、関係性操作、印象評定および攻撃評定の相関関係、また、関係性操作、誘発事象後の怒り感情および攻撃評定の相

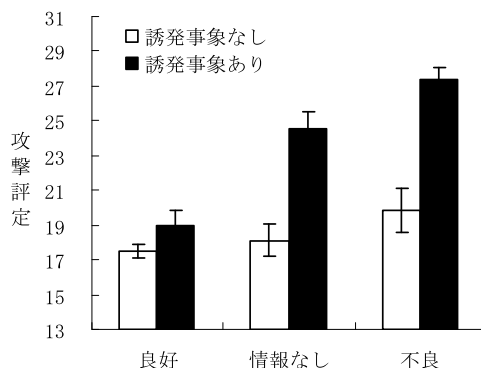


Figure 1 地位が低い攻撃対象者に対するTDAに及ぼす関係性の調整効果（エラーバーは標準誤差を示す）

関関係を検討した。関係性操作は、関係性不良を1および関係性良好を2と定義して分析に用いた。その結果、関係性操作は印象評定と有意な正の相関を示し（ $r = .70, p < .01$ ）、印象評定は攻撃評定と有意な負の相関を示した（ $r = -.82, p < .001$ ）。また、攻撃評定と有意な正の相関を示した誘発事象後の怒り評定（ $r = .51, p < .05$ ）は、関係性操作と有意な負の相関を示した（ $r = -.59, p < .05$ ）。

考 察

本研究では、攻撃対象者の特性として攻撃者と攻撃対象者の関係性の良好性および誘発事象の有無を操作し、地位が低い攻撃対象者に対するTDAに及ぼす関係性の調整効果を検討した。その結果、関係性良好群の攻撃対象者は誘発事象を行ってもTDAを表出されないのに対し、関係性不良群および統制群としての情報なし群の攻撃対象者はTDAを表出されること、また、関係性良好・誘発事象あり群の攻撃対象者に対する攻撃評定は、関係性不良・誘発事象あり群および情報なし・誘発事象あり群の攻撃対象者に対するTDAより有意に低いこと、さらに、相関分析から、良好な関係性が攻撃対象者に対する好意的印象を増加させ、攻撃評定に負の影響を及ぼすと同時に、攻撃評定に正の影響を及ぼす誘発事象による怒り感情は、関係性の良好性によって減少することが示された。これらの結果は、TDAを表出されやすい地位が低い攻撃対象者であっても、関係性が良好であることが緩衝効果として作用し、置き換えられた攻撃を誘発しないことを示している。

本研究では、関係性不良・誘発事象あり群の TDA が統制群としての情報なし・誘発事象あり群の TDA より強い傾向にあった ($p=.074$)。しかし、Pedersen et al. (2008) の研究 3 では、誘発事象あり群におけるネガティブ群と統制群としてのニュートラル群の間に単純主効果は見られず、両群の TDA に有意差はなかった(統計量に関する表記なし)。両研究の差異について考察すると、攻撃対象者の差異が考えられる。Pedersen et al. (2008) は、TDA パラダイムにおいて一般的に設定される攻撃対象者 (i.e., 研究アシスタント) を設定し、特性としてポジティブ、統制群としてニュートラルおよびネガティブを操作している。一方、本研究は、TDA を表出されやすい地位が低い攻撃対象者を設定し、特性として関係性の良好、統制群としての情報なしおよび不良を操作した。そのため、TDA を表出されやすい地位関係に加えて、特性としての関係性も悪いため、統制群と比較して TDA を促進する方向に作用した可能性が考えられる。また、Vasquez et al. (2007) は、TDA を表出されやすい外集団の攻撃対象者を設定して研究を行っているが、自己比較および外集団からの区別というポジティブな脱カテゴリー化操作と統制群としての情報なしとの比較(研究 1) および自己開示というポジティブな脱カテゴリー化操作と統制群としての情報なしとの比較(研究 2)を行っているが、ネガティブな操作がない。さらに、TDA 理論 (Miller et al., 2003) は、攻撃対象者のネガティブな特性が、些細な誘発事象をより敵意的に解釈する方向に影響し、これらの特性を備えた攻撃対象者は置き換えられた攻撃を誘発しやすいと仮定する。以上を総合すると、攻撃対象者のネガティブな特性の組み合わせは TDA を促進する可能性が示唆される。

本研究の意義と示唆は次の通りである。ひとつは、地位が低い攻撃対象者に対する TDA の緩衝効果が示されたことである。地位関係上、TDA を表出されやすい (i.e., 置き換えられた攻撃を誘発しやすい) 地位が低い個人であっても、日頃の対人関係において良好な関係性を構築することで、やつ当たりの対象となることを防ぐことができると言える。もうひとつは、攻撃対象者のネガティブな特性の組み合わせが、TDA を促進する可能性が示唆されたことである。置き換えられた攻撃は、挑発の源泉ではない他の対象者に向けられる点の特徴であり、攻撃対象者の特性によって攻撃強度が変化する。本研究で得られた以上のふたつの知見は、攻撃対象者の特性が TDA の調整変数として重要であることを示すものである。

【引用文献】

- Anderson, N. H. (1968). Likableness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, *9*, 272-279.
- Aviles, F. E., Earleywine, M., Pollock, V. E., Stratton, J., & Miller, N. (2005). Alcohol's effect on triggered displaced aggression. *Psychology of Addictive Behaviors*, *19*, 108-111.
- Bushman, B. J., Bonacci, A. M., Pedersen, W. C., Vasquez, E. A., & Miller, N. (2005). Chewing on it can chew you up: Effects of rumination on triggered displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, *88*, 969-983.
- Denson, T. F., Aviles, F. E., Pollock, V. E., Earleywine, M., Vasquez, E. A., & Miller, N. (2008). The effect of alcohol and the salience of aggressive cues on triggered displaced aggression. *Aggressive Behavior*, *34*, 25-33.
- Denson, T. F., Pedersen, W. C., & Miller, N. (2006). The Displaced Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, *90*, 1032-1051.
- Dollard, J. (1938). Hostility and fear in social life. *Social Forces*, *17*, 15-26.
- Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Ensari, N., & Miller, N. (2002). The out-group must not be so bad after all: The effects of disclosure, typicality, and salience on intergroup bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, *83*, 313-329.
- Hovland, C., & Sears, R. (1940). Minor studies of aggression: VI. Correlation of lynchings with economic indices. *Journal of Psychology*, *9*, 301-310.
- Marcus-Newhall, A., Pedersen, W. C., Carlson, M., & Miller, N. (2000). Displaced aggression is alive and well: A meta-analytic review. *Journal of Personality and Social Psychology*, *78*, 670-689.
- Miller, N., & Marcus-Newhall, A. (1997). A conceptual analysis of displaced aggression. In R. Ben-Ari & Y. Rich (Eds.), *Enhancing education in heterogeneous schools: Theory and application*. Ramat-Gan, Israel: Bar-Ilan University Press. pp.69-108.
- Miller, N., Pedersen, W. C., Earleywine, M., & Pollock, V. E. (2003). A theoretical model of triggered displaced aggression. *Personality and Social Psychology Review*, *7*, 75-97.

- Pedersen, W. C. (2006). The impact of attributional processes on triggered displaced aggression. *Motivation and Emotion, 30*, 75-87.
- Pedersen, W. C., Bushman, B. J., Vasquez, E. A., & Miller, N. (2008). Kicking the (barking) dog effect: The moderating role of target attributes on triggered displaced aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin, 34*, 1382-1395.
- Pedersen, W. C., Gonzales, C., & Miller, N. (2000). The moderating effect of triggering provocation on displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology, 78*, 913-927.
- 淡野将太 (2008). 置き換えられた攻撃の誘発 (TDA) に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響 教育心理学研究, *56*, 182-192. (Tanno, S. (2008). Status of provocateur and target, and triggered displaced aggression. *Japanese Journal of Educational Psychology, 56*, 182-192.)
- 淡野将太 (印刷中). 置き換えられた攻撃研究の変遷 教育心理学研究 (Tanno, S. (in press). Research on displaced aggression and triggered displaced aggression: A review. *Japanese Journal of Educational Psychology*)
- Vasquez, E. A., Denson, T. F., Pedersen, W. C., Stenstrom, D. M., & Miller, N. (2005). The moderating effect of trigger intensity on triggered displaced aggression. *Journal of Experimental Social Psychology, 41*, 61-67.
- Vasquez, E. A., Ensari, N., Pedersen, W. C., Tan, R. Y., & Miller, N. (2007). Personalization and differentiation as moderators of triggered displaced aggression towards out-group targets. *European Journal of Social Psychology, 37*, 297-319.

(主任指導教員 前田健一)